繊維産業の栄光を伝えるモニュメント

アートと時代を保存する見識に感服

スペインのバルセロナにあるサグラダ・ファミリア教会。建築家アントニオ・ガウディ（1852～1926）の代表作でユネスコの世界遺産になっている。ガウディ存命中に完成せず、没後百年にあたる2026年の完成が予定される壮大なプロジェクトだ。出来ている部分も自然のモチーフを大胆にとりいれ、曲線を多用して強烈である。

大阪都心を歩いていて、突然、ガウディに出くわした。いや、正しく言えばガウディではなく、日本にガウディを最初に紹介したとされる建築家・今井兼次（1895～1987）の巨大モニュメント《フェニックスモザイク「糸車の幻想」》である。

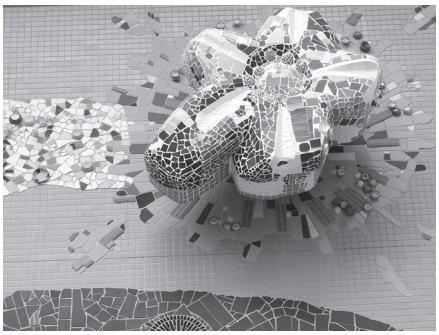
昭和のはじめ、今井は早稲田大学を卒業後、東京の地下鉄駅舎設計の視察で渡欧した。大阪市立工芸学校（現・市立工芸高校）が教育法をとりいれたドイツの美術学校「バウハウス」などのモダニズム建築を学びつつも、合理的・機能主義とは異なるガウディの建築に魅了されて強い影響を受けた。

ご存じの方も多いだろうが、昭和37（1962）年、長崎市に開館した西坂公園の日本二十六聖人殉教記念館や、それと隣接する聖フィリッポ西坂教会が今井の代表作で、外壁にモザイクを施したユニークな建物は確かにガウディを彷彿とさせる。

その今井のガウディばりのモニュメントがあるのが、堺筋と本町通りの交差点、昨年9月に竣工して本店が移転した大阪商工信用金庫のビルである（中央区本町2-2-8）。ビルそのものは安藤忠雄氏の設計で建てかえられた。

本町通りから「大阪商工信金ホール」への案内のある階段を上ると、巨大な糸車が姿をあらわす。誰でも間近で見ることができ、躍動するフォルムに豊かな色彩、体の底から力が湧いてくるパワフルなモニュメントである。

もともとここには、昭和36（1961）年、東洋紡が「東洋紡本町ビル」を建て、地域の憩いの場として屋上を開放し、このモニュメントを設置した。「東洋紡本町ビル」も大阪市より「生きた建築ミュージアム・大阪セレクション」に指定されていた建物である。ビルの建て替え前は本町通りから見上げると、屋上にモニュメントの先端だけを眺めることができ、ぜひとも近くで見たいと思っていたのだが、地上におろされ、復元保存されたのである。

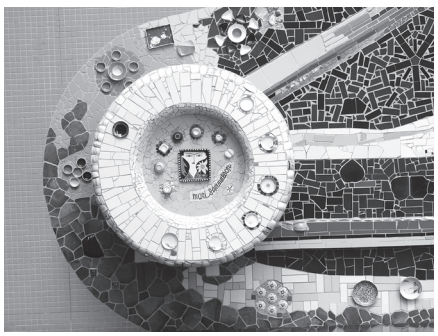

同じく部分。巨大でガウディのようにフォルムも躍動する

日本の繊維産業の中心地である船場には、昭和6（1931）年に綿業会館（重要文化財、中央区備後町）が建てられ、戦後も昭和35（1960）年に村野藤吾の設計で竣工した輸出繊維会館（中央区備後町）の内部には、堂本印象の陶板壁画が制作された。「糸車の幻想」は輸出繊維会館の翌年にできている。

タイトルに不死鳥を意味するフェニックスが用いられているのは、戦争で焦土と化した街からの復興に「再生～永遠の力強さ」への思いをこめたからだという。また、今井は職人の手技を建築に残すことを意識し、自ら職人に混じってタイルを貼った。「糸車の幻想」も壺や皿など瀬戸物が貼り付けられ、欠けた陶器も用いているのは、廃棄物の再利用で「再生」をシンボリックに示したためともされる。

「糸車の幻想」の翌年に出来たのが日本二十六聖人記念館だが、長崎まで行かなくても、高度成長期を迎えた大阪の繁栄を象徴する今井のユニークなモニュメントを近くで見ることができるようになったのはうれしい。

近年、大阪では歴史的な建造物が安易に取り壊されているような気がする。同ビルの外壁にあったモダンアート協会の創立会員・植木茂（1913～1984）の石彫レリーフ群も、新しいビルの東側壁面と駐車場に移された。地域のシンボルとして巨大モザイクやレリーフを復元保存した関係者の見識を称え、感謝したい。


《フェニックスモザイク「糸車の幻想」》の部分。茶碗や皿がモザイクに貼り付けられてカラフル。

筆者プロフィール
橋爪 節也　はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。